

「漢詩かるた」について

吉 海 直 人

【キーワード】漢詩かるた・唐詩選かるた・闘牌かるた・詩かるた

一、「漢詩かるた」は日本発祥

かつて「漢詩かるた」は、その名称から受ける印象として、中国発祥のカルタのように思われていた（かるたも同様）。それを補強するかのように、文禄期成立の「漢詩かるた」が古書目録に登場したこともある。しかしながらそれは誤りだったようである。それにしても「唐詩選」の五言絶句や七言絶句をかるたに仕立てたものが少なからず現存していることで、中国発祥説には蓋然性があると思われる。

ところが肝心の中国で古い「漢詩かるた」の存在が確認されおらず、そのため最近では、「歌かるた」の成立以降にその

バリエーションの一つとして「漢詩かるた」が日本で誕生したと考えられるようになっていく。本論も日本発祥説の立場から、あらためて「漢詩かるた」について考察してみたい。

二、出版目録の中の「漢詩かるた」

従来は「漢詩かるた」に対する関心が薄く、現物収集も精力的には行われていなかった。そのため「漢詩かるた」に関する研究論文も皆無に等しい。もちろん断片的には参考になる記述もあるので、とりあえず過去の研究史をたどっておきたい。

まずは論文ではないが、『日本社会事業三版』（明治四〇年）があげられる。これは辞書の類だが、かるたの研究には有益な記述が認められる。たとえば「カルタ」項中の「詩がるた」に、歌かるたは百人一首を通例とし、古今集、源氏、伊勢物語

など種々ありて、各々其の歌を諳するの便に、之を弄ぶものなり。漢学の隆盛なる藩々にては、唐詩選、三体詩などを、上半首と下半首と分ちて記し、上の句を読み下下の句を取り、又は下の句を読み上上の句を取る^を、勝負の遊びを為す間に、詩を暗誦するの稽古として作り用ひたり。

と出ている。「漢学の隆盛なる藩」で「詩を暗誦するの稽古」として作成されたという解説は参照に値する。ただし「三体詩かるた」の現物は未だ見たことがない。また「骨牌」項には、宝暦四年の書籍目録には詩加留多・狂歌かるた・俳諧百韻かるたを載せている。詩カルタは唐詩選の絶句五十首を拵んで読札に絵を添へてゐる。これは五言絶句と七言絶句との二種がある。

と説明されており、宝暦四年には木版の絵入かるたが刊行されていたことまで記述されている。宝暦四年の「詩加留多」は確認していないが、同じく「骨牌」項には、

明詩かるた（五十首） 宝暦十三年 大阪

も掲載されている。これは『享保以後大阪書籍出版目録』の「宝暦十三年十一月」のところに、

明詩かるた 五十首 百枚

作者 後藤主水（泉州堺）

板元 丹波屋半兵衛（長堀心斎町）

と出ているものであろう。なお「明詩かるた」についても現物を見たことはない。

『享保以後江戸出版目録』には、寛延元年八月のところに、

唐詩訓解五言絶句かるた 壹箱五拾首

板元 銭屋三郎兵衛

売出 西村源六

と、もつと古い「唐詩選かるた」の記録があった。また明和三年には、

明詩絶句かるた 箱入上下 百冊

明和

板元 大坂丹波屋半兵衛

売出 同 利兵衛

とある。これは先の「明詩かるた」の再版であろうか。さらに天明七年十二月には、

唐詩選かるた七言絶句五十首 全百枚

天明七年未十二月

板元 売出 小林新兵衛

と出ているが、現物は未確認である。こういった出版目録の情報からでも、「漢詩かるた」の流通を知ることができる。

三、山口吉郎兵衛氏の『うんすんかるた』より

山口吉郎兵衛氏『うんすんかるた』は、かるた研究には必要不可欠の参考書である。「漢詩かるた」についても、参考になる記述が出ている。まず「詩カルタ」項には、

和歌の外に男子向として唐詩選等の詩集より五言、七言絶句を採った「詩カルタ」が上は雲上やんことなきあたりより下は市井の有識階級に亘って行われた。(120頁)

と説明されている。その上で「新院道晃御両吟千句」(寛文十一年)や「人倫訓蒙図彙」(元禄三年刊)を引用して、近世前期(寛文頃)には既に成立していたであろうことが示唆されている。

なるほど、近世前期頃に高級な「漢詩かるた」が工芸品として製作された可能性もあるが、その実物は報告されていない。そのため成立時期については不明とせざるをえないのだが、少なくとも一般に広く流布したのは江戸後期であろう。

幸い『うんすんかるた』には、現存する「漢詩かるた」の書

「漢詩かるた」について

誌や図版が掲載されているので、大変参考になる。まず「版影唐詩選詩カルタ 五十組」として、

竪八センチ二ミリ、幅五センチ六ミリ。印刷品、楷書二十五組、草書二十五組、唐詩選より五言絶句五十首を採り、起承札と転結札とに別れている。両札共、表は素地白色、裏は薄青無地紙。楷書は楷書に、草書は草書に合せるようになっていいる。調点も印刷してある。質素な実用品。(天保頃)。(135頁)

と、その書誌が示されている。これは五言絶句の五十首かるたのようである。続いて「唐詩選詩カルタ 七十五組」として、竪九センチ、幅六センチ三ミリ。唐詩選中の五言絶句七十五首を起承札、転結札とに分け、楷書で正しく書いてあるが、詩題、作者名は入っていない。両札共、表は素地白紙、裏は黒地更紗模様千代紙張になっている。質素な実用品である。(天保頃)。(132頁)

と解説されている。こちらは五言絶句七十五組のかるたのようである。ともに成立を「天保頃」としているが、その根拠は示されていない。

さらに別のところに「唐詩選かるた」として、

唐詩選の五言絶句の詩を七十二首選んで、一二句には文人画の之に因んだ図柄を描き、三四句は文字ばかりのもので、書風は真書で中々よく、版本である。嵩山堂から梓行したことは中の包紙の意匠で明である。(井出熊次郎氏蔵)

(152頁)

と紹介されている。これは全七十二組であるらしいが、読札に絵が入っている点に特徴がある(図版もあり)。しかもここには「嵩山堂から梓行したことは中の包紙の意匠で明である」とあり、かるたの包み紙によって板元を割り出している点が注目される。

四、藩校における「唐詩選かるた」の活用

ここにあげられている「嵩山堂」とは、江戸の嵩山房須原屋(小林)新兵衛のことである。板元の小林新兵衛は、享保九年に服部南郭訓点の『唐詩選』の版本を出版しているのだが、それがロングセラーとなり、近世後期における唐詩選のブームまで巻き起こしている。そのため再版のみならず、注釈書や国字解などの類書を次々と出版して当たりを取っている。

天明七年十二月の「唐詩選かるた」(七言絶句五十首)刊行

にしても、ほぼ同時期に絵入りの『唐詩選画本』(天明八年刊)を刊行しており、ほぼ連動しての売り出しと思われる。絵入本の出版というのは、読者がより大衆化・通俗化していることを示すものである。このことは先の『日本社会事彙三版』に「漢学の隆盛なる藩々にては、(中略)詩を暗誦するの稽古として作り用ひたり」とあることや、『うんすんかるた』に「上は雲上やんごとなきあたりより下は市井の有識階級に亘って行われた」とあることにも通底している。「唐詩選かるた」は学習用の遊戯具だったわけである。

近世後期において、「唐詩選」が藩校のテキストに採用されたことも、「唐詩選」ブームの要因の一つかもしれない。それに関して『会津若松市史』上巻(昭和十六年)の「第五節 歌留多」の中に、

戊辰前藩士間には詩かるたと称し、唐詩選の五言起承二句を楷書にて記せしものありしが今は廃れたり。(91頁)

とあることも参考になる。これは会津藩特有の「板かるた」の説明文の一部だが、百人一首が女子用のかかるたであるのに対して、「唐詩選かるた」は男子(藩士の子息)用と、男女によるかるたの使い分けがあったことを示唆している²⁾。これは松平定

信が寛政の改革を施行した際、藩士の子弟に「唐詩選かるた」を奨励したことを発端とすると説明されているが、その信憑性はわからない。

ただし末尾に「今は廃れたり」とあるように、現在の会津若松市では「板かるた」も「漢詩かるた」もまったく行われていない。ところが「板かるたは」その後北海道に渡り、「下の句かるた」として現在も盛んに遊ばれている。一方の「漢詩かるた」にしても、三重県桑名市の鎮国守国神社において、現在までかろうじて継承されている。

三重県桑名市は、文政六年（一八二三年）に白河藩主であった松平定永が所領替えて移つてきており、その際に藩校「立教館」で行われていた「唐詩選かるた」がそのまま桑名にも将来されたと言ひ伝えられている。日本において唯一「漢詩かるた」が伝承されていることからすると、妥当な説明かと思われる。

なお現在行われている桑名市の「漢詩かるた」は、材質は板製ではなく紙製であり、七十四組百四十八枚揃いの「唐詩選かるた」である。別名「けんかかるた」と称されているように、壮絶な奪い合いが「かるた取り」の醍醐味となっているとのこと。

「漢詩かるた」について

とで、その点も会津の「板かるた」の伝統を継承していると思われる。

残念なことに板製の「漢詩かるた」はほとんど伝わっていない。私の手元にあるのは、七言絶句百六十五組（三百三十枚）というものであるが、板を薄くした高級品であり、現在の厚くて丈夫な板かるたとは仕様が異なっている。もつとも百人一首の板かるたにしても、滴翠美術館に所蔵されているものなど、やはり薄板の高級品である。

五、現存する「漢詩かるた」

紙製肉筆の「漢詩かるた」は、現在も桑名市で遊ばれている。その他、江戸・明治時代のものもかなりの数が現存している。古書目録に掲載されたもの（私が目を通したもの）だけでも、

「闘牌カルタ」（七十四組百四十八枚）

「漢詩かるた」（三百三十枚）

「漢詩かるた」（三百四十八枚）

「唐詩選かるた」（百五十九枚）

「漢詩かるた」（文政六年、七十三枚揃）

「漢詩カルタ」（五言絶句七十四首、七言絶句百六十五首）

「唐詩選カルタ五七言絶句」(手写)

「唐詩品彙詩骨牌」(八十三枚揃)

「唐詩五絶かるた」(百四十八枚)

「唐詩かるた」(一組、山内香雪書、佐竹永海画)

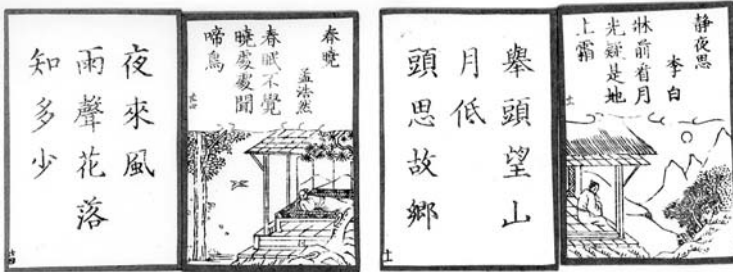
「唐賢詩賦かるた」(江戸後期、七言絶句、百枚揃)

などがあげられる。また山口泰彦氏『最後の読みカルタ』には、「詩歌留多」(天保十二年作、三百四十枚)が紹介されている。

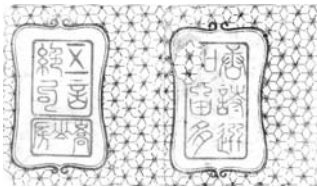
私も「漢詩かるた」のことが気になったので、数年かけて収集してみた。まだ全貌を解明するには程遠いが、取りあえず手元にある十二種を以下に紹介しておく。

① 「唐詩選かるた」

全七十四組揃い。唐詩選に掲載されている五言絶句七十四首を木版かるたに仕立てたもの。上の句絵入り。上の句には題・作者・漢詩が記されている。下の句には転結句(三、四句)が記されている。表白紙、裏貼薄青紙。表には朱で一から七十四までの漢数字が付けられている。かるたの寸法は、タテ8.1センチ×ヨコ5.5センチ。木箱入り。箱の蓋に「詩加留多五言」と墨書されている。かるたを包んでいる和紙には「唐詩選加留多」



図版1 木版絵入五言絶句かるた



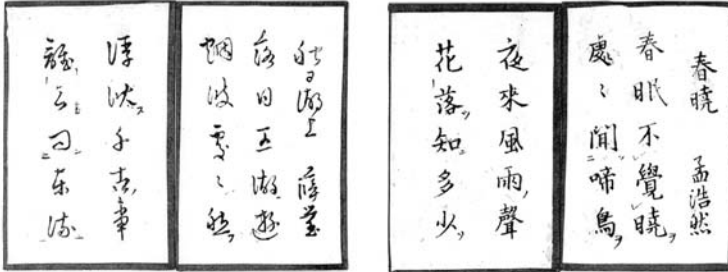
図版1-2 かるたの包紙

「五言絶句 崇山房」と朱で印刷されており、小林新兵衛刊行であることがわかる。『うんすんかるた』にある「唐詩選かるた」と同一と思われるが、枚数が異なっている。本来は七十四組揃いであろう。

② 「唐詩選かるた」

全四十八組。五言絶

句。木版絵なし。半分に分け楷書と草書で書き分けている。上の句には題・作者・漢詩が記されている。下の句には転結句（三、四句）が記されている。表白紙、裏貼青紙。かるたの寸法は、タテ8.2センチ×ヨコ5.3センチ。木箱入り。箱の蓋に「詩骨牌^{カトルケ}壱箱」と書かれた紙が貼られている。「うんすんかるた」にある「版彫唐詩選詩カルタ 五十組」と同一と思われるが、枚数が



図版2 木版五言絶句かるた

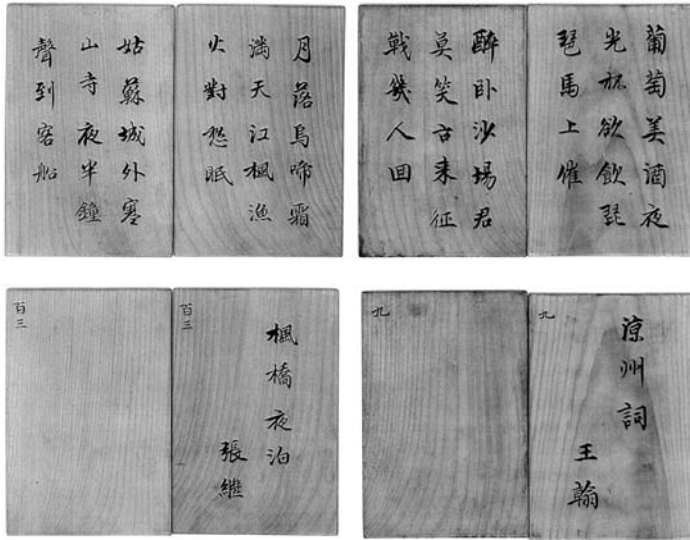
異なっている。本来は五十組揃いであろうか。

③ 「板製唐詩選七言絶句かるた」

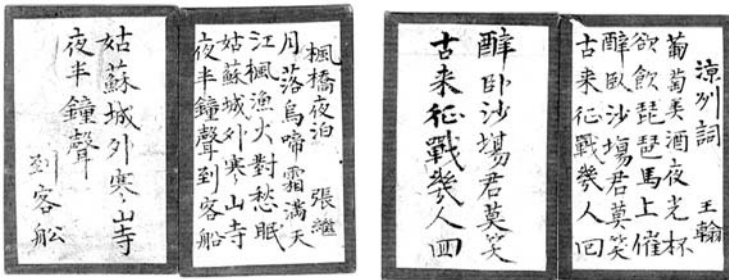
全百六十五組揃い。唐詩選に掲載されている七言絶句全百六十五首を薄い板かるたに仕立てたもの。手書き。上の句の表には起承句（一、二句）が書かれ、裏には題・作者と左上に漢数字が書かれている。下の句には転結句（三、四句）が書かれ、裏には左上に漢数字が書かれている。かるたの寸法は、タテ9.7センチ×ヨコ6.5センチとやや大きめである。厚さは約1.5ミリ。木箱入り。蓋には「漢詩かるた」と墨書された題簽が貼られている。成立は幕末頃か。板製の漢詩かるたは比較的珍しい。

④ 「七言絶句漢詩かるた」

全百十五組。上の句には題・作者・漢詩が記されている。下の句には漢詩の転結句（三、四句）が記されている。表白紙、裏貼茶紙。手書き。かるたの寸法はタテ7.3センチ×ヨコ4.8センチ。木箱入り。蓋の裏に「天保十一年庚子三月十六日／於十軒店求之／田嶋為貞」という筆書きがあり、これによって所有者の名前と購入年月日がわかる。



図版3 板製唐詩選七言絶句かるた表・裏



図版4 七言絶句漢詩かるた

⑤ 「七言絶句漢詩かるた」

全三百六十枚。他に予備の白紙札四枚付き。箱なし。上の句には起承句（一、二句）が記されている。下の句には漢詩の転結句（三、四句）が記されている。上の句札の中には朱で転結句を書き込んだものもある。原則として上の句は二行書き、下の句は三行書きだが、二行書きの中に下の句も含まれている。楷書体と草書体が混ざっている。表白紙だが柿渋を塗った茶色い札も交



図版 4-2 かるたはこの書き付け

じっている、裏貼青紙。裏金紙に雷紋入り。手書き。かるたの寸法はタテ6.6センチ×ヨコ4.4センチ。虫損あり。本来の枚数不明。

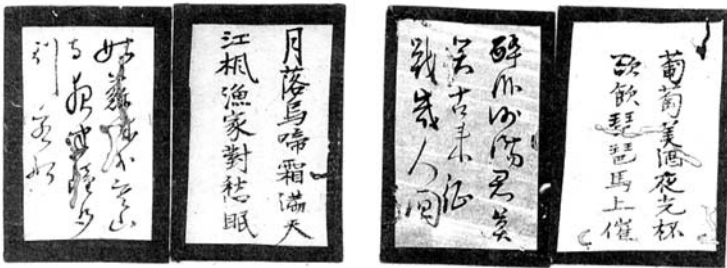
⑥ 「七言絶句漢詩かるた(下の句のみ)」

下の句のみ百四十一枚(不揃い)。上の句欠。箱なし。下の句には漢詩の転結句(三、四句)が記されている。表白紙、裏貼茶紙。手書き。かるたの寸法はタテ6.9センチ×ヨコ4.7センチ。天保十一年の漢詩かるたとほぼ同様の作り。

⑦ 「七言絶句漢詩かるた」

上の句七十八枚、下の句八十一枚(不揃い)。木箱

「漢詩かるた」について

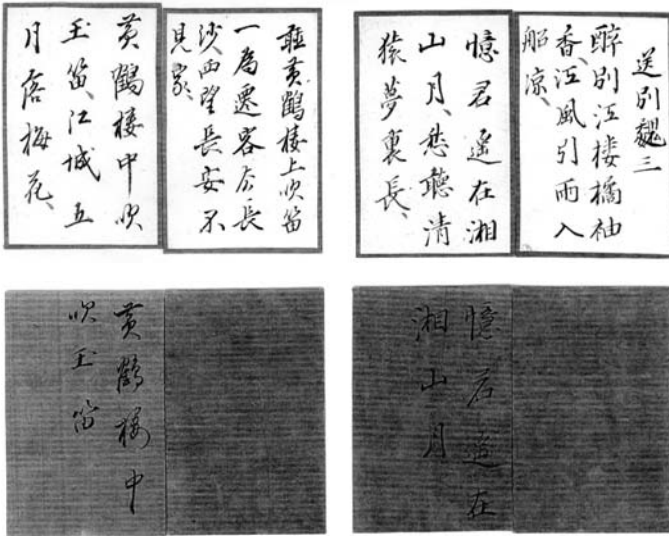


図版 5 七言絶句漢詩かるた



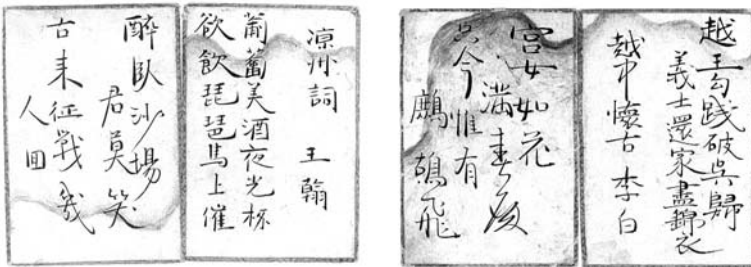
図版 6 七言絶句漢詩かるた(下の句のみ)

入り。蓋の上には「唐詩選かるた」と書かれている。上の句には題・漢詩の起承句(一、二句)が記されており、起句の後に朱点が施されている。また裏には下の句の転句(三句)が書き入れられている。下の句には漢詩の転結句(三、四句)が記されている。表白紙、裏貼茶紙。かるたの寸法はタテ8.4センチ×ヨ



図版7 七言絶句漢詩かるた 表・裏

コ5.4センチ。
 ⑧ 「七言絶句漢詩かるた」
 上の句四十八枚、下の句四十九枚（不揃い）。箱なし。上の句には題・作者・漢詩が記されている。下の句には漢詩の転結句（三、四句）が記されている。表白紙に青の雲入り。裏貼金紙に雷紋入り。手書き。やや高級な仕上げ。かるたの寸法はタテ8.0センチ×ヨコ5.5センチ。本来の枚数不明。



図版8 七言絶句漢詩かるた

⑨ 「五言絶句漢詩かるた」

七十四組揃い。「唐詩選」の五言絶句をかるたに仕立てたもの。手書き。上の句には題・作者・漢詩が記されている。下の句には漢詩の転結句（三、四句）が記されている。表白紙、裏貼紺紙。木箱有り。蓋には「百人一首五言絶句」とある。上段に漢詩かるた、下段に百人一首を収納。かるたの寸法はタテ7.8センチ×ヨコ6.2センチでやや横幅が広い。

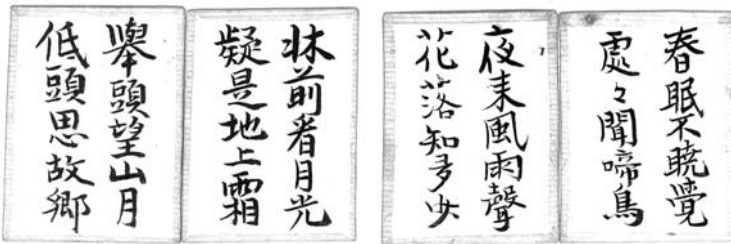
⑩ 「五言絶句漢詩かるた」

七十四組揃い。「唐詩選」の五言絶句をかるたに仕立てたもの。手書き。上の句には起承句（一、二句）が記されている。下の句には転結句（三、四句）が記されている。表白紙、裏貼薄茶紙で板目模様入り。別に「上の句」「下の句」と書かれた札あり。木箱有り。蓋には「五言絶句」とある。かるたの寸法はタテ7.2センチ×ヨコ5.5センチでやや横幅が広い。

「漢詩かるた」について



図版 9 五言絶句漢詩かるた



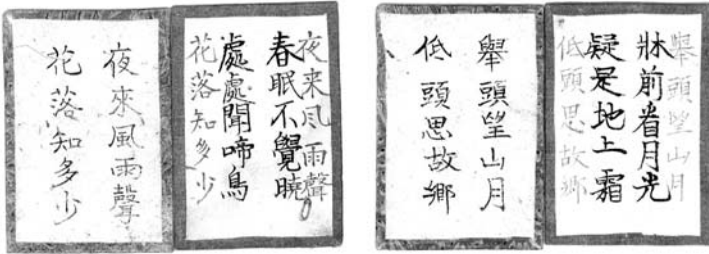
図版 10 五言絶句漢詩かるた

⑪ 「五言絶句漢詩かるた」

上の句七十三枚（一枚欠）、下の句七十四枚。「唐詩選」の五言絶句をかるたに仕立てたもの。手書き。上の句には起承句（一、二句）が記され、その外側に転結句（三、四句）が朱で記されている。下の句には転結句（三、四句）が記されている。表白紙、裏貼りは上の句が水色、下の句が茶色（植物模様入り）と色分けされている。木箱入り。かるたの寸法はタテ7.7センチ×ヨコ5.3センチ。虫損あり。

⑫ 「五言絶句漢詩かるた」

七十四組揃い。「唐詩選」の五言絶句をかるたに仕立てたもの。手書き。上の句には起承句（一、二句）が記されている。下の句には漢詩の転結句（三、四句）が記されている。表白紙、裏貼青紙。紙箱有り。蓋の裏に「貞清」と書いた紙が貼られており、これがかかるたの筆者名と思われる。またかるたの左下には印が押されている。かるたの寸法はタテ6.4センチ×ヨコ4.5センチ。虫損あり。



図版 11 五言絶句漢詩かるた



図版 12 五言絶句漢詩かるた

六、「漢詩かるた」の行方

こうしてみると漢詩かるたは、近世後期に藩校で唐詩選が流行したのを受け、小林新兵衛による木版漢詩かるたの製品化が行われたようである（教育玩具）。かるたの素材としては板製と紙製の二種があり、また製法としては肉筆と木版がある。木版には絵入りと絵なしがある。かるたに記されている漢詩は唐詩選がほとんどだが、歌かるたと違って五言と七言の二種に分けられる。枚数は不特定ながら、七言は百六十五組、五言は七十四組を基本とする。今後の資料発掘によって、いずれ全貌が解明されるであろう。

これまで「漢詩かるた」で遊ばれることはほとんどなかったが、最近では漢詩の見直し（再評価）が行われる中、新たななる「漢詩かるた」も登場している。その一つが大富部睦子等による「対句漢詩かるた」（憧憬社）である。また佐賀県多久市でも「漢詩かるた」（佐賀県漢詩連盟）を編纂している。

また中国でも唐詩選がブームになっているようで、そのため日本の「漢詩かるた」が中国に逆輸入されているという話を耳にしている。今後どのように展開・発展するのかかわからないが、

日中の文化交流と合わせて、教育玩具としての「漢詩かるた」の広がりを期待したい。

〔注〕

（1）吉海直人「かるた」資料としての出版目録「同志社女子大学大学院文学研究科紀要6・二〇〇六年三月には、「明詩かるた（五十詩）」（明和三年二月刊）、「唐詩選かるた（七言絶句五十首）」（天明七年十二月刊）が採録されている。

（2）「板かるた」に関しては、吉海直人「板かるたの歴史——会津発祥説の検討——」同志社女子大学日本語日本文学25・二〇一三年六月を参照していただきたい。

〔追記〕

大牟田市の三池かるた記念館・資料館に、漢詩かるたが九点も所蔵されていることがわかった。その中に含まれている絵入の板かるたは大変珍しいものである。詳細は今後の課題として、取りあえず略目録だけ記しておきたい。

① 五絶漢詩板かるた 肉筆 江戸末期 下の句絵入り 上の句の裏に題・作者名および下の句あり

② 闘牌（五絶漢詩かるた）肉筆 箱に「闘牌」とあり 裏張、上の句紺色・下の句茶色

- ③ 五絶漢詩かるた 肉筆 裏張、銀緑色
- ④ 五絶漢詩かるた 肉筆 裏張、薄青色
- ⑤ 五絶漢詩かるた 肉筆 題、作者名なし 裏張、茶色
- ⑥ 五絶漢詩かるた 木版 裏張、薄青色
- ⑦ 七絶漢詩かるた 肉筆 上の句に漢詩全部が書かれている
裏張、茶色
- ⑧ 七絶漢詩かるた 肉筆 細長札 裏張、上の句黄色・下の
句紺色

- ⑨ 七絶句唐詩骨牌 木版 裏張、薄青色 箱に「七絶句唐詩
骨牌〔服部氏〕」とある

*本稿は二〇一四年度同志社女子大学研究助成金（個人研究）の
成果の一部である。